

2020年6月14日

味わったことのないマナ

キリストの聖体の祭日を迎えました。伝統的に教会では、初聖体クラスなどで準備を続けてきた子どもと共に、はじめての聖体拝領をお祝いすることが多い日です。今年は、新型コロナウイルス感染症対策が続く中で、おとなも子どもも、信仰生活とご聖体（聖体の秘跡）のつながりについて考える時となっています。

第一朗読の申命記は、「主が導かれたこの40年の荒れ野の旅を思い起こさない」（申8・2）と出エジプトの出来事にふれ、イスラエルの民が荒れ野で神の賜物—マナー—を受けて養われ、約束の地へと導かれたことを想起するように招きます。そこで「主はあなたを苦しめ、飢えさせ、あなたも先祖も**味わったことのないマナ**を食べさせられた。人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きることをあなたに知らせるためであった」（申8・3）と説明し、荒れ野における試練の目的を示します。イスラエルの民は40年という気の遠くなるような長い時間を、荒れ野で過ごしました。しかしその試練は、イスラエルの民と神の民であるわたしたちが人間らしく生きるために、本当に必要な《日ごとの糧》とは何であるのかを知り、「主の言葉」を味わうことができるようにする試練でもありました。

わたしたちも、聖体の秘跡に近づくことが困難な時期が続いています。行く手に霧が立ち込めているようなこの時は、改めて「主の言葉」と「ご聖体」がキリスト者を生かすいのちの糧であり、他の地上の食べ物とは全く異なる「**味わったことのないマナ**」であることを再発見できる恵みの時なのかもしれません。どうか皆さんもご自宅で《祈りの場》たとえば家庭祭壇を整え、小さな十字架とローソクを置き、ご自分で決められた時間にその日の聖書の箇所を読み（『毎日のミサ』参照）、しばし呼吸を整えて黙想する時間を取っていただけたらと思います。主キリストは、きっと、聖霊の働きをもって「いつもわたしの内におり、わたしもまたいつもその人の内にいる」（ヨハネ6・56）ということに気づかせてくださることでしょう。

さて、政府の緊急事態宣言が解除され、わたしたちの教会も少しずつ、段階的に、公開ミサと活動を再開していくための準備をはじめています。

菊地大司教様は、6月10日付で新しいメッセージ：
「6月21日からの教会活動の再開に向けて」を発売されました。
<https://tokyo.catholic.jp/archbishop/message/39027/>

大司教様ご自身が、上記文書についてビデオメッセージで解説されています。
<https://tokyo.catholic.jp/archbishop/movie/39046/>

立川教会の皆さんには、近日中に上記、大司教メッセージと併せて「新型コロナウイルス感染症対策のための立川教会ガイドライン」をはじめ、いくつかの文書をお送りする準備を進めています。届きましたらご確認ください。

6月21日以降も、もうしばらくの間、高齢の方と基礎疾患のある方については、ご自宅での待機をお願いすることになります。一日も早く、すべての人が安心して教会に再び集い、ご聖体に与ることができるよう祈り続けたいと思います。皆さんのお祈りとご理解に深く感謝をささげます。

「パンは一つだから、
わたしたちは大勢でも
一つの体です。」
(1コリ10・17)

カトリック立川教会 主任司祭
東京教区 ヨゼフ 門間 直輝